

# この国に 生まれてよかった この時代に 生きてよかった

## ●相容れない戦争と障害者

「過去に目をつむる者は、現代において盲目である」。これはドイツの元大統領のヴァイツェッカーによる有名な言葉です。ドイツは、この考え方をもとにユダヤ人などの大虐殺に対する戦後の総括と国家による償いを行なってきました。しかし、そのヴァイツェッカーもほとんど目を開かなかった問題があります。それは、ナチスドイツ下での障害者の状況であり、具体的には暗号のように言われ

てきた「T4作戦」の問題に沈黙してきたことです。

「T4作戦」を簡単に紹介すると、第二次世界大戦中にナチスが行なった「障害者安楽死計画」を意味します。その犠牲者は、ドイツ国内で20万人以上、ヨーロッパ全体では30万人以上を数えます。詳細についてはあとで述べます。

「T4作戦」の詳しい説明に入る前に、「戦争と障害者」について考えておきましょう。本連載の前号で、「障害は、本人を取り巻く環境との関係で重くもなれば軽くもなる」と

述べましたが、戦争ほど最悪の環境はないように思います。戦争状態に入ると、障害のある人に対する「厄介者意識」は極に達します。戦争を続けるうえで足手まといになるというのがその理由です。

\*

実際にも戦時下の日本では、障害のある人のことを「こくつぶし」とか「非国民」とさげすみました。多くの精神病院では、「役立たずには食べ物不要」とする軍事政権の方針にもとづき、入院患者への食糧供給が絞られ、たくさんの餓死者が出ました。戦争という環境は、障害を最も重くすると言っているでしょう。

そればかりではありません。かつて国連は、「戦争は大量の障害者をつくり出す最大の悪である」と断言したように、新たな障害のある人を生み出すのも戦争です。戦場での負傷による後遺症や戦争を背景とする貧困や栄養失調などの影響、ベトナム戦争以降クロールズアップされてきた心的外傷後ストレス障害（PTSD）など、戦争を主因とする障害のある人はおびただしい数に上ります。世界中には10億人余の障害のある人が存在しますが、直接か間接かは別として、その原因の圧倒的多くが戦争とされています。

こうみていくと、障害のある人と戦争は絶対に相容れません。障害のある人は、平和な社会でなければ人間らしく生きていけないのです。だからこそ、誰にも増して戦争への危うさを感じやすく、平和の尊さにこだわるのです。

## ●開戦と同時に始まった「T4作戦」

ここで、「T4作戦」の詳細に入ります。一つ前もって話しておかなければならないのは、なぜドイツで起こったこの問題にこだわるのかということです。

それは、私を知る限り、近現代の戦争で最も多くの障害のある人が犠牲になったのが「T4作戦」だからです。そこに「戦争と障

害者」の本質が凝縮され、時間と空間を超えて現代の私たちの社会に重なる共通のテーマを見いだせるのではと考えました。

昨年、NHKの取材班と一緒に二度にわたってドイツを訪問し、かつての大量虐殺の現場に身を置き、遺族や障害関係団体の代表、研究者などからたくさんの証言を得ることができました。これらをもとに、日本ではほとんど知られていない「T4作戦」の問題に光をあてたいと思います。

「T4作戦」とは、ヒトラーの命令書にもとづいて、1939年9月1日（ドイツでの第二次世界大戦開戦日）から1941年8月下旬にかけてナチスが行なった障害のある人に焦点をあてた抹殺政策です。主な対象は精神障害者と知的障害者ですが、治る見込みのない人や遺伝性の疾患のある人も加えられました。

「T4作戦」という呼称は、作戦本部がベルリン市内のかつての「ティアガルテン通り4番地」に設置されたことに由来します。その場所はヒトラーが常駐した総統本部の至近距離にあり、ナチスにとってこの作戦がいかに直接的で重要であったかがうかがえます。作戦本部の態勢は、約50人の精神科医を中核に総勢400人余のスタッフでした。ここが指令塔となり、ドイツ全土の精神病院や障害者施設などを権限下に置き、「安楽死計画」を遂行するための名簿の提出を求めたり、名簿にもとづいて「死の選抜」を行ないました。もう一つ管轄下に置いたのが、ドイツ全域に設置した6カ所の専用殺戮施設です。主



## 第2回 戦争と障害者

### 藤井克徳

日本障害者協会代表・きょうされん専務理事

ふじい かつのり / 1949年生まれ。養護学校教員をへて、日本初の精神障害者のための共同作業所「あさやけ第2作業所」や「きょうされん」の活動に専念。日本障害フォーラム（JDF）や、日本障害者協会（JD）など、様々な団体の役員をつとめる。



▶学芸員のガブリエルさんの話を聞く